

許振東 日本漂流記

2019-12-07 09:30 筆者：郝成 出典：中国経営網

本紙記者/郝成/東京/北京

(編集者注) 北京から香港へ、そして日本へ。許振東は50年の人生において3つの地域を転々とし、紆余曲折ありつつもドラマチックなビジネスライフの軌跡を描き出した。

彼は、人生が上手くいっているときは資本市場を騒がせた青鳥系列の実質支配者であり、人生が不遇であるときは香港を逃げ出し、フォーシーズンズホテルの宿泊客となった。今、彼は再起しようと日本を選び、そこで世界を切り開こうとしている。

しかし、現在の許振東は、相変わらず、青鳥系列会社との関係を断ち切ることができず、さらには本土との連絡を断つこともできないでいる。許振東の日本漂流は、彼自身の過去、現在、未来、そしてある種の中国人ビジネスマンの運命を映し出す鏡のようなものである。

第一線調査

北京青鳥の前董事長 許振東の日本漂流

5年前、彼は名門の「フォーシーズンズホテル香港」の宿泊客の1人であった。3年前に、難を避けて日本に転居し、それ以来帰国していない。父親が亡くなったときでさえ、国外から弔辞を送った。

彼の名は許振東、今年55歳。彼はかつて北大青鳥の董事長かつ実質支配者であり、青鳥系列は本土の資本市場で有名だった。現在、彼は依然として複数の青鳥系列会社の法定代表者である。2014年、許振東は諸般の事情によりフォーシーズンズホテルで生活していた。2015年、中国証券監督管理委員会は許振東に10年間の証券市場への参入禁止という罰則を科した。

2016年、許振東は香港を離れ、日本で暮らすようになった。すでに香港のパスポートを所持していたため、2015年8月、北京の戸籍を抹消した。

日本では、若い女性数名(うち1人は女性芸能人)が、「朝陽」、「崇文」、「恒潔」、「金山」などの北京の地名を使用して会社を登録し、許振東の秘密のビジネスネットワークの拠点となっている。さらに、彼は日本の証券会社まで買収した。

日本で漂流中の許振東は、北大青鳥の董事長を退任したが、「中国経営報」の記者が入手したいくつかの資料によると、青鳥系列の一部企業は、依然として許振東と資金のやり取りをしている。また、許振東は、頻繁に青鳥系列の幹部を日本への視察や観光に招待している。

1年前、父親が亡くなったとき、許振東は弔辞を人に持って来させた。弔辞の中で、「必ず戻ってくる」と言っていた。しかし、現在、日本に身を置く許振東は、現地の高利貸しなどの問題に関わったとして、現地で注目されている。

許振東の今後の命運はどうか？

香港から日本へ

「中国経営報」の記者の取材によれば、2014年以降、許振東は何度も日本に渡航し、2016年以降はほぼ日本で生活している。さらに2017年には日本に就労ビザを申請した。現在保有している就労ビザは、年に1回更新する必要がある。

確実なのは、許振東が中国本土に帰っていないことである。北大青鳥の関係者によれば、2018年3月3日、許振東の父親が北京で病死し、許振東は、日本の浅草寺と護国寺で焼香した後、人に弔辞を託し、最後に「必ず戻ってくる」と言っていた。

許振東の父である許継孔は、山東省青州の出身で、長年軍隊に所属し、表彰を受け、文革時代に左派を支持し入京した。許振東の弔辞によると、彼の父親は誠実で情が厚かったため、文革後も本籍地に追い返されることなく、北京に留まることができたそうである。

公開資料によると、1964年2月16日生まれの許振東は、1983年9月に北京大学コンピューター学科に入学し、卒業後は同学科で修士課程を専攻していた。許振東の恩師である楊芙清は、1983年に教授に昇進し、コンピューター学科の主任となった。

楊芙清は、チームを率いて、中国のために「青鳥プロジェクト」という有名なソフトウェア工学研究を開始し、「ソフトウェア設計を手作業から工業化生産に変革させた」。1994年、「青鳥プロジェクト」の科学研究成果をより良く転化させるために、北大青鳥軟件有限公司が設立され、許振東は年末に参画した。

過去の報道によれば、許振東は、それ以前は北京黄河電子技術社の総経理、ORACLE China社のマーケティング部経理、海南証券情報サービス社の董事、総経理を担当していた(1992年1月から1993年9月)。

許振東は、オラクル・グローバル・セールスパーソン・オブ・ザ・イヤーの24人のうちの1人にも選ばれたそうだが、その後の言動から見ると、証券会社での経験が彼に大きな影響を与えたようである。許振東主導の下、青鳥系列はかつて「買、買、買」の代表となり、2008年に、「財経」誌においてその資本運用が掲載されると、「青鳥はもはやソフトウェア会社というだけではなく、投資会社のようなものだ」と評された。

しかし、2004年に北京東直門の土地区画に介入してから、青鳥はかつてないほど複雑な局面に遭遇した。北京城建社、華遠地産社、国浩集団など有名企業が争奪に介入し、訴訟も多く発生し、取引額、貸付額はそれぞれ58億元、31億元に上った。

争奪が続くなか、東直門交通ハブプロジェクトは一度遅れをとったものの、北京オリンピック前に外観立面を無理矢理完成させた後、当事者間の対立が再燃したことにより、引き継ぐ勇気のある者はいなくなった。

2015年、中国証券監督管理委員会は、許振東に10年間の証券市場への参入禁止処分を科した。問題となったのは、青鳥華光の2007年から2012年にかけての関連取引における収益、利益の水増しである。これは、「証監会が」（※訳者補足）資本運用という面において、国民に姿勢を示したものと言える。

「蓬山此より去ること多路無し、青鳥よ殷勤として為に探り看よ」。李商隱の名句中の青い鳥は、伝説では三本足の神鳥で、西王母の使いとされている。日本に身を置く許振東は、青鳥系列企業の幹部を日本に招待し、資本の志を伝え続けている。——「中国経営報」の記者が確認したところ、許振東は、複数の若い女性を通じて、日本で系列企業を登録し、証券会社を買収した。

日本のビジネスネットワーク

青鳥系列企業の幹部らは、よく許振東から日本に招待され、様々なビジネスパーソンや官界関係者と会い、提携について話し合っていた。提携するプロジェクトは、時には不動産、時にはメーカーであったが、更に多かったのは資本市場関係であった。許振東は、少なくとも日本上場企業5社の買収を提案した。

許振東はまた確実に証券会社1社を買収した。——2017年、朝陽社が東京のワンアジア証券を買収したが、この会社の以前の代表者は山崎という日本人だった。山崎氏は、かつて野村證券に勤めており、本を出版したり、議員選挙に立候補したりなど、資本家の中では有名な人物であった。

2018年5月、日本の立花恵美という女性が、金山エネルギーという会社を登記したのだが、この会社は、官何某が登記した恒潔社と同じ登録住所であった。その後、金山エネルギーがソーラー企業の国海能源を買収し、山崎氏は買

収後の会社の経営陣の一員となったが、ほどなくして山崎氏も同社を去った。事情を知る人によれば、山崎氏は著名人として、後に許振東らから距離を置くようになった。

「俺たちのものだ！」許振東は、来日した青鳥系列の企業幹部によく宣言していた。しかし、多くの場合、それらの話合い、ひいては契約までしたスタジアムや土地、ホテルの取引を、最終的には反故という形で取り消していた(日本は契約後7日以内なら破棄できる。)。

しかし、そのような意向が示された後、青鳥系列企業の幹部は帰国して日本に送金した。最初に資金を受け取ったのは朝陽社、その後、恒潔社などの会社が kirim や lucky vibe などの北京や香港の関連会社から送金を受け取った。

「中国経営報」が入手した送金記録によれば、多くの住所や口座名が青鳥企業と関係していた。しかし、関連企業や幹部はこれについて回答をしていない。

実際に、より大きな資金である7億円(約4500万人民币元)がビジネスという名目で日本に送金され、恒潔社に渡った。しかし、最終的にそれは許振東と官何某が現在住んでいる別荘に変わった。この別荘は、東京神宮にあり、別荘とは言うものの広さは200平方メートルほどしかない。

青鳥系列企業の幹部の中で、許振東がどこに住んでいるのかを知っている者はほとんどいない。会うのはいつも他人の家か公共の場で、ホテルであっても許振東は自分の部屋ではなくロビーを選ぶ。

許振東のこうした用心深さが最も表れたのは、女性芸能人の劉何某の母親が来日し、パスポートの入国目的との不一致により一晩取り調べを受けたときである。許振東はこれにより警戒し、直ちに香港行きを取り消した。「風声鶴唳といった感じだが、彼は自分のこと、例えば自分が誰の事件に関わっているのかなどことはほとんど話さなかった」。日本で許振東に会ったことがある人が言っていた。

許振東は、終始気にかけている資本市場のほか、大阪府の公務員と連絡を取り合い、大阪でカジノ事業の立上げを企てていた。実際、大阪府議会でも何度かカジノ建設の可否を議論してきたが、今のところ結果が得られていない。

2019年に入り、日本の「ZAITEN」誌では、許振東が李堅と組み、「天悦」という会社の名義で後藤学園に1億5000万円を貸し付け、毎月元金1000万円及び月利5%の支払い、不履行の場合は15%の金利とすることを要求していると報じられた。

日本では、高利貸しには相応の資格が必要であるが、許振東らはその資格を持っていなかった。彼と組んでいた李堅も北京大学の卒業生で、1981年に来日し、かつて日本のパチンコ王・岡田和生と知り合った。岡田和生は、2018年に香港の廉政公署（※訳者注：香港の汚職捜査機関）に逮捕されており、その嫌疑事項でも李堅と関わっていた。

さらにタイミングが悪いことに、少し前に、日本の上場企業である GFA で逮捕者が出て、同社は暴力団と関係があり、マスコミにリークした内部関係者を脅したとされる。2018年には、許振東は同社と提携について複数回話し合いを持っており、買収案件を紹介していた。

許振東が想像していた資本スキームは確立されることがなく、青島系列企業の幹部たちに描いた美しい未来はなかなか現実のものとはならなかった。

少し前には、北湖 9 号にある青島本部の前に、返済を求めるプラカードを掲げた人々がいた。債務金額は、毎月数百万人民元である。ある当事者は、日本に行って許振東に返済を求めると宣言したが、北大青島は、これについてコメントしなかった。

火葬場攻防戦の「技法」

2019年8月末、雑誌「ZAITEN」と「夕刊フジ」東京版がまたスクープを出した。後者は、「大揺れ廣濟堂、火葬場攻防戦」という見出しで、日本の上場企業である廣濟堂の資本争奪戦の舞台裏を報じた。許振東は再び「謎の人物」として登場し、その背後にある資本操作は馴染みのものであった。

報道によれば、廣濟堂は年初めにベインキャピタル主導の MBO(マネジメント・バイ・アウト)から TOB(株式公開買付け)に変更したことで、経営権争いが激化した。その後、ラオックス株式会社社長の羅怡文が登場し、許振東も登場した。

廣濟堂の本業は印刷、出版であるが、その収入の多くは子会社の東京博善に依存し、同社は東京都内に 6 か所の火葬場から収益を上げている。日本メディアの報道によれば、「同社は、廣濟堂の収益の半分以上を占めている」。

しかし、今、普濟堂という会社がこれに介入し、同社は黄桃梅が東京の住宅街に登録した会社であるが、看板は見当たらない。黄桃梅も若い女性であり、許振東とは親密な関係にあると言われている。もっと直接的な証拠としては、

普濟堂の資金源が宣武社であることが挙げられる。

普濟堂がそれ以上に日本投資家の注目を集めたのは、上場企業である LCHD の買収に関与した件である。9 月、LCHD は、北京北大青島投資有限公司が普濟堂を通じて 31%の株式を 30 億円(1 株あたり 1,750 円)で買収すると発表した。買収条件として、新たに 5 名の取締役を増やすことが挙げられ、その中に北大青島の副総裁である徐柱良の名前もあった。

リストにあったもう 1 人は「孫田夫」で、わが国の公開情報によれば、この人物は秦立資本株式会社の代表パートナーであり、来日して 30 年になり、「以前、日本債券信用銀行、日本 IBM、ドリームインキュベータ(ベンチャーキャピタル)、みずほ証券シニア中国経済アナリスト、三菱 UFJ 証券チーフ中国経済アナリストを勤めたことがある」。

しかし、不思議なのは、当時、LCHD の株価は 600~700 円しかなかったにもかかわらず、なぜ普濟堂は 2 倍のプレミアムで買収するのかということである。日本メディアの報道によれば、買収資金 30 億円のうち、22 億円の資金源は YMM という日本の会社で、同社は日本人によって最近登記され、その関連会社は水耕栽培の緑黄色野菜事業を行っている。

残りの 8 億円は、宣武社から調達する予定である。LCHD は、以前は本荘良一が社長を務めていたが、その後、同氏は相場操縦の容疑で日本の警視庁に起訴され、2018 年 6 月に辞任した。後任には不動産開発業を営む金子修が就任した。2019 年 8 月、LCHD は、63 億円の融資問題の解決能力がないことを発表し、これにより株価が急落した。

これは、許振東が初期に中国で行った資本操作の再現のようである。彼は、かつて搜狐等の有名企業への参入を表明したものの、最終的には何ら成果もなく終わったことがあり、この一連の動きにおいて、関係企業の株価が急落したことがある。

日本メディアは、報道の最後に、日本経済の水面下で一部の中国人の活動により混乱が生じているとコメントした。報道が頻繁になるにつれ、許振東の日本での動きがますます密かになってきたと北大青島の幹部たちは話した。

取材によると、劉何某のビザは 2020 年初めには期限が切れる。その際、このような世間の注目の下で彼女と許振東のビザが延長されるかは、今後を見守る

必要がある。

特別な関係にある者

1983年10月に西部で生まれた劉何某は、卓亜君という芸名で歌手として活躍し、映画やテレビドラマに出演していた。彼女の歌った「ロリータ」(少女と中年男性との恋愛を描いたアメリカの小説、映画のタイトルでもあり、文芸、コスプレの一種とも言われている。)は、かつて人気を博した。また、著名な映画監督や音楽家ともコラボしていた。

劉何某が以前契約していた創盟音楽は、北大青鳥音楽グループと関連がある。2005年、ワーナー・レコードの前社長である許曉峰は、退職後、創盟音楽の総裁に就任し、その後、北大青鳥音楽グループの深セン社と厦門社の役員、グループ総裁を歴任した。現在は、北京大学文化産業研究院の研究員でもある。しかし、許曉峰は記者の取材を拒否した。

1988年6月に南部沿岸地方に生まれた蔡何某は、かつて青島系列企業にいたが、その後、工商登記データを見ると交代されたようである。現在、蔡何某は、日本に長期的に滞在しているわけではない。

官何某は1993年5月に中北部のある省で生まれた。これ以外に、特別な関係にある女性は、もう1人いる。

記者が入手した法的文書によれば、この4人は、許振東のために朝陽(劉何某)、宣武(蔡何某)、崇文(官何某、実際の登記は「恒潔」)等の北京風満載の企業を登記している。

もう1人年配の、現在はゴルフ関係の仕事に携わっている紀何某がいて、彼女は許振東の通訳であり、また、日本の様々な人物を許振東に紹介している。

しかし、来日当初、人数が多いことを考慮してか、許振東が女性たちに提供した資金はあまり多くはなかった。朝陽社を例に挙げると、許振東が女性たちに支給した給与は毎月25万円(約1.6万人民元)であり、これは日本法務局が定める外資企業の代表取締役の平均報酬であるが、彼女たちの家賃、保険、光熱費、家政婦費用、親族や友人の来日費用等は全て会社が負担していた。

上記給与により、この女性たちや許振東は、就業ビザを取得していた。しかし、1年に1度、ビザを更新するために本国に戻る必要がある。彼女たちは、実際には、ほとんど仕事していなかった。

許振東は、現在、香港のパスポートを所有しているため、2018年5月に北京の戸籍を抹消した。